

「現代教養日本語実践新聞」第3号の発行に向けて

——取材日記3

高橋 茂美

2019年（令和元年）11月29日（金）

昨日の雨がすっかり止んで、朝から良い天気だ。今日は第4時限目と第5時限目にそれぞれ一つずつ取材が入っている。「日本語表現実践論」の山場を迎えた。

まずは、第4時限目。このクラスは今回、初めて学外の方々を取材する。晴れているとはいえ、ひんやりとした微風を感じる。防寒対策をしっかりと、学生とともに目的地へ向かう。

到着したのは、久寺家鷲神社。本学とも関係のある由緒ある神社だ。階段を上がり、鳥居の前に進むと、昨年と変わらぬ風景が広がった。「いつまでも色あせない場所」、それが鷲神社だ。

本殿に上がるよう声を掛けられた。本殿に上がるための階段は、たちまち学生の靴で埋めつくされた。宮司様の湯下正博氏と氏子様の筆頭総代でいらっしゃる成嶋誠氏のお話を伺う時間が、穏やかに流れていく。本当にかげがえのない時間だ。

最初は少し緊張気味だった学生も徐々に馴染んでいった。宮司様と言葉のキャッチボールを懸命に行った学生の姿が印象に残った。鷲神社と久寺家地区との関わり、湯下氏や成嶋氏が地域社会において果たされている役割を、学生は若者らしい感性で捉えたはずだ。木々に囲まれた鷲神社の清々しい空気を胸いっぱい吸い込んで、神社を後にした。

次は、第5時限目。このクラスは、本学の守衛棟でいつも我々を見守ってくださっている石川光男氏を取材した。学生とともに石川氏を教室へ案内しているとき、ユーモアあるお話で和ませてくださった石川氏。日没前の明るさが残るキャンパスに、その制服姿がひと際目立った。

石川氏が大切にしていることの中に、人の顔を覚えることと挨拶をすることがある。我々は取材を行う前から、石川氏が守衛棟にいらっしゃることを知っていた。それは、石川氏が常に挨拶をしてくださっていたからだろう。石川氏にも、次から次へと質問が飛んだ。学生

の質問に答える石川氏の言葉の中に、さりげないお心遣いを感じた。キャンパスの安全をチェックするための眼力も、石川氏がこれまでのご経験から磨かれてきたものだ。

これからも守衛棟の方々にはお世話になる。キャンパスの正門を通るたびに、今日の取材を思い出すだろう。石川氏をはじめ、心強い方々が、そこにいらっしゃるからだ。

「現代教養日本語実践新聞」の問い合わせ先

中央学院大学現代教養学部

高橋茂美

takahashis@fla.cgu.ac.jp